

「ダイアナの選択」

☆☆☆

2009（平成21）年2月24日鑑賞＜GAGA試写室＞

監督：ヴァディム・パールマン

脚本：エミール・スターン

原作：ローラ・カジシュキー『春に葬られた光』（ヴィレッジブックス刊）

ダイアナ・マクフィー（15年後のダイアナ）／ユマ・サーマン

17歳の女子高生のダイアナ／エヴァン・レイチェル・ウッド

モーリーン（17歳のダイアナの親友）／エヴァ・アムーリ

ポール・マクフィー（ダイアナの夫、哲学教授）／ブレット・カレン

エマ・マクフィー（ダイアナの娘、小学生）／ガブリエル・ブレナン

マイケル（ダイアナのクラスメートの男の子）／ジョン・マガロ

2008年・アメリカ映画・90分

配給／デスペラード、日活

<ネタバレ厳禁！>

ヴァディム・パールマン監督の第1作『砂と霧の家』（03年）の評論で私は家の競売に関する日米比較などの法律事情を書き、物語については「アツと驚く悲劇的な結末」としか書けなかった（『シネマルーム6』171頁）が、それはあくまで私の自主的判断。しかし、彼の第2作『ダイアナの選択』のプレスシートでは物語の結末を明らかにすることは厳禁、とされているから、第1作以上の「アツと驚く結末」については一切ノーコメント。

この物語の主人公は、17歳のダイアナ（エヴァン・レイチェル・ウッド）と15年後のダイアナ（ユマ・サーマン）。高校生だったダイアナは15年後、大学教授のポール（ブレット・カレン）と結婚し、今は小学校に通う一人娘エマ（ガブリエル・ブレナン）を授かっていた。

優しい夫に守られながら子育てと美術教師の仕事を両立させているダイアナは今幸せいっぱい。理想的な家庭を築いていたが・・・。

<異質な視点の邦題だが、なぜか納得>

この映画の原題は『THE LIFE BEFORE HER EYES』だから、直訳すれば「彼女の目の前の人生」。ところが邦題は『ダイアナの選択』。こりゃ全く異質な視点からの邦題だが、きっとあなたもこの邦題には納得するはず。

オバマ新大統領のもと新たな日本の選択が求められているが、支持率が10%台となった麻生政権のもと、日本国民が最も必要としているのは、衆議院の解散総選挙による政権の選択。アメリカ大統領について共和党ではなく民主党を選択したこと、初の女性大統領ヒラリー・クリントンではなく、初の黒人大統領バラク・オバマを選択したことはアメリカ国民に与えられた選択権行使の結果だが、安倍、福田、麻生と続く自民党の看板掛け替え作戦は、日本国民に与えられるべき政権選択権を無視する実にけしからん行為だ。

人間はいついかなる時も選択をくり返しているわけだが、『ダイアナの選択』という邦題をつけたのは、きっとよほど重大な選択だから。さて、そんなダイアナの選択とは？

<ダイアナは、人生の最大のバクチの勝者？>

シングルマザーの母親のもとで生活し、地元のヒルヴュー高校に通う17歳のダイアナはかなり問題児のよう。ダイアナが交際している男も麻薬の密売人らしいから、彼女の将来はかなりヤバそう。他方、モーリーン（エヴァ・アムーリ）はシングルマザーの家庭だということ以外にダイアナと何の共通点もない品行方正な女の子。そんな2人が親友になったきっかけは、ロッカールームでタバコを吸っていたダイアナに先生が見回りに来たことを教えてくれたことだが、他人の家のプールに勝手に入り込んで泳いでいる姿を見ると、モーリーンがダイアナの悪影響を受けそうで心配になってくる。

17歳の女子高生の関心事はボーイフレンドだが、片思いの彼氏からデートに誘われたと言って喜ぶモーリーンのうぶさに比べれば、ダイアナはきっと百戦錬磨？もっとも、売人の彼氏と少し前に別れたダイアナは、目下空家状態らしい。そんな不良少女のダイアナが哲学教授ポール・マクフィーの講演を聞いて感銘を受けるとはちょっと意外？その内容は「未来の自分をイメージすることで現在を前向きに生きられる」という、いかにも哲学者らしい小難しい(?)ものだが、なぜそんなメッセージが不良少女の心に響いたの？そしてまた、あの不良少女だったダイアナが、15年後の今そんなポールと結婚し幸せな家庭を築いているとは・・・。

女性にとって結婚は最大の夢であると同時に最大のバクチ。そう考えるとダイアナはその人生最大のバクチの勝利者、と私には思えたが・・・。

<銃乱射事件は、あくまで素材>

この映画は17歳のダイアナが親友のモーリーンと共に過ごす物語と、15年後のダイアナが夫や娘と共に過ごす物語を交差させながら描いていく。スクリーンにがぜん緊張感が走るのは、トイレに入っていたダイアナとモーリーンが突然校内に響きわたった銃声のような音を聞いた時。これは一体ナニ？ひょっとしてホントに銃声？なぜ学校の中でそんな音が？

そこでダイアナが思い出したのは、昨日ダイアナの前で息巻いていたクラスメートのマイケル（ジョン・マガロ）の「クラス全員を殺す」の言葉。凍りつき身動きが取れない状態の2人の前にドアを押し開けて入ってきたのは、銃を持った正真正銘のマイケルだ。なぜマイケルがそんな行動を？もちろん、ダイアナとモーリーンはこの時学校の中で起きている惨状を見ることはできないのだが、映画とは便利な芸術で、私たち観客はスクリーン上でその惨劇模様をしっかりと確認することができる。教室の中で血を流して倒れているたくさんの死体、血を流しながらかろうじて逃げ出すことができた生徒たち。かけつける武装警察官と子供を心配して集まってくる家族たち。私が『エレファント』（03年）で観た、あのコロラド州コロンバイン高校で実際に起こった銃の乱射事件と同じ光景だ（『シネマルーム4』221頁）。

なるほど。この映画はそんなキレた高校生による銃乱射事件をテーマとした問題提起作？一瞬そう思ってしまったが、実はマイケルによる銃乱射事件はダイアナの選択のための素材。さて、女子トイレの中でマイケルがダイアナとモーリーンに突きつけた選択のテーマとは？

2009（平成21）年2月27日記